



# Jonathan Nott

## マーラー：交響曲第3番 を語る

—— 9月の定期公演ではマーラーの交響曲第3番を指揮されます。今ここに、この作品をマーラーが作曲した上部オーストリアのシュタインバッハに今も残る湖畔の作曲小屋の写真を持って来ました。マーラーは、こうして自然の懐ふところに抱かれながら、ひとり閉じこもって作曲に集中したのですね。

ノット：ここには行っていませんが、交響曲第9番と《大地の歌》を作曲したトーブラッハの森のなかの作曲小屋を訪ねたことがあります。シュタインバッハのものと同様、ほんとうに小さな小屋なので驚きました。内部はもう空っぽでしたが、この狭い小屋にピアノを置いてマーラーが作曲しているとき、きつとピアノの音が室内に耳をつんざくように響きわたったのだらうと考えながら、一心不乱に作曲するマーラーの姿を思い浮かべました。

—— ふと作曲の手を休めると、窓外に広がる瑞々みずみずしい自然の姿がマーラーの目を慰めたに違いありません。さて、本題に入りましょう。交響曲第3番はマーラーの交響曲のうちでも飛びきり大規模な作品で、六つの楽章をもち、

アルト独唱に女性合唱と児童合唱も加わり  
ます。内容的にも非常に多彩な作品ですね。

ノット：マーラーの作品は、人間および世界と神といったスピリチュアルな事柄に、つねに深く根ざしています。ブルックナーと全く同程度に、と言えるほど。もちろん、表現の面ではマーラーの方がずっと多様で幅広いですが。たとえば第3交響曲では、世俗的なポルカと宗教的なコラールの両方が用いられています。<sup>(注1)</sup>

—— 聖と俗、つまり厳肅で高尚な音楽から素朴で大衆的な音楽まで、音楽言語の多様さという点で、マーラー自身が述べていますように、この交響曲は、まさに世界全体を映したものなのですね。マーラーが作曲段階で各楽章に付けていた標題からは、作品そのものが世界と自然、あるいはそれどころか宇宙の成り立ちをテーマとしていると言えると思うのですが、これらの標題については、どのようなお考えをおもちですか。

ノット：これらの標題は、ここでは何がテーマなのかというような、包括的なテーマを知ることができるという意味でのみ興味深いと考えています。これらを眺め渡すと、自然のなかに宿る根源的な原初の分子、またはそれがもつ根源的なエネルギーが全体的なテーマとなっていることがわかります。しかし、それ以上に深入りするのは非常に危険です。マーラーは、この作品ばか

# Masayoshi Iwashita

ジョナサン・ノット×岩下真好 対談

Symphony Lounge [シンフォニー・ラウンジ]

取材・文／岩下真好 音楽評論家

interview&text by Masayoshi Iwashita

りでなく、第1番や第2番、そして第4番でも、こうしたような標題的な言葉を残しています。それは、これまでの常識を超えた極めて大胆で斬新な自作を少しでもよく聴衆に理解してほしいからでした。初演の際、なによりもまず作品に耳を傾けてほしかった。そのための最も単純な方法として言葉を頼りにしたのです。

——マーラーは、それらの標題を後に全て削除しています。

ノット：深読みは禁物なのです。たとえば、当初は「野の花々が私に語ること」と名づけられていた第2楽章。初めの部分は、そうしたいのなら、可憐な野の花を思い描くのも結構でしょう。それは自由です。だがそれに続いて、いつものマーラーどおりの攪乱効果が入る。<sup>(注2)</sup>それは、むしろ威嚇的ですからあり、優美さとは対極にあります。

——たしかにこの箇所は、花のイメージからは遠いですね。

ノット：この楽章は、花が語ることを以上のことを語っているように思えるのです。もしかすると傷つき壊れやすい若者の愛が描かれているのかもしれませんが。しかも現実のことではなく、夢や幻想のなかでのこととして。しばしばマーラーが扱うテーマですよね。マーラーが抱くイメージは、つねに重層的なのです。しばしば、一つの楽章に全く正反対の表現が現れる。ですから、マーラー自



身に発する標題だからといって、その方向からだけ解釈するわけにはいきません。それではマーラーの音楽の幅を狭めてしまうことになってしまいます。

——私たち聴き手は、標題を巨大な交響曲の道標として尊重しつつ、それだけに囚われることなく、マーラーの音楽世界の多重的な広がり素直に身をゆだねればよいわけですね。ところで、交響曲第3番は長大な緩徐楽章で結ばれます。第9番のアダージョとともに、交響曲の通例に反したマーラーならではの独特な終楽章であるわけですが、全曲のいわば結論であるだけに、この楽章をどう見るかが解釈の大きなポイントとなりそうです。

ノット：第3番の終楽章と第9番の終楽章アダージョとの違いについて質問されたことがあります。そのとき私はこう説明しました。第9番にあっては、最初の音から、人生との別れに思いを致す心情が鮮明です。しかし、マーラーは生きることを諦めたくはない。生を求めて闘おうという意志がある。スコアの終わりから2ページ目のところまでは、そうなのです。死なないぞ、死な

ないぞ、と。そして、ようやくアダージョの最後のところに来て、ついに死の不安から解放されるのです。

——第3番の場合は、それとは異なるのですね。ノット：第3番の終曲は、転換をもたらす出来事が何も突発しないまま進んでゆきます。ティンパニや鐘の音がつくる響きも、見せかけのもの、仮象にすぎないように思われます。いつか確信が得られるのではという希望を抱いたものの、それは結局のところ叶わないのです。そういう、ほんとうに悲しい音楽です。

——けっして満ち足りた幸福な終章などではない……。

ノット：ええ、そうではありません。深い憂愁を帯びた幕切れです。そもそも作品全体がショーペンハウアー流の行方も定まらぬ盲目の意志との闘いです。この作品でのマーラーには、自分で自分の主張に確信がもてないようなところが、いやそれどころか自分で自分を中傷するようなところがあります。

——この交響曲には近代人マーラーの懷疑精神が反映されていて、ひとつの視点から単純に割り切って解釈することを許さない複雑な複合体が出来上がっている。そこにマーラーの生きた時代の生々しい息吹を感じることもできそうです。

ノット：この交響曲は、リヒャルト・シュトラウスの《アルプス交響曲》と哲学的な構想の面で非常によく似ています。すなわちアンチ・キリスト教交響曲。両者とも、神はいないということから出発しています。天使が話して聞かせてくれるような桃源郷を、もはや信じることはできません。世界は物質で構成されている。そして、その世界のなかで私は孤独だ、ひとりぎりだ、という思いが

根底にあります。

——とするならば、マーラーが、この交響曲の第4楽章の歌詞に強烈なアンチ・キリスト教論者だったニーチェの言葉を選んだ理由も理解できます。この『ツァラトウストラはこう言った』のなかからの詩句は、ニーチェの永遠帰郷思想の詩的要約なのですが、これはキリスト教の天国を真っ向から否定する思想です。

ノット：今いる場所に戻って来ることを私たちが永遠に繰り返すという思想ですね。

——ええ、しかも、すべてが全く同じ形で同じ順序で回帰するとされています。

ノット：たしかにマーラーは、この交響曲のなかで、自分自身がそれを信じたかっと思えます。でも信じ切ることではできなかった。その確信の揺れが、そのまま取り入れられて、あらゆる可能性を含んだ素晴らしい交響曲が出来上がっているのです。

——まさに一切の矛盾をも含んだ、宇宙のような広がりをもつ大交響曲なのですね。よくわかりました。ありがとうございました。

#### 〈対談を終えて〉

作品の本質に正面から向き合うマエストロの姿勢に強い感銘を受けた。マーラーがニーチェの詩句を歌詞に採用しながら、いっぼうでなぜ第5楽章に天使を登場させ、終楽章は神の愛を表現したものだと思われているのかという長年の疑問も、マエストロの明快な説明で一気に氷解した。

1) 第3楽章にはボルカ風の部分があり(374小節以下)、第6楽章にはコラル主題が登場する(41小節以下)。

2) 第2楽章の短調に転じるトリオの部分(50~90小節)を指す。この部分は変形されてもう一度繰り返される。